第4回

鞠智城跡「特別研究」成果報告会 発表レジュメ集

平成28(2016)年
3月5日(土) 13:00～17:00

くまもと県民交流館パレア パレアホール
(テトリアくまもとビル10F)

主催：熊本県教育委員会
後援：水城・大野城・基肄城1350年事業実行委員会　熊本県文化財保護協会

鞠智城イメージキャラクター
ころう君

第４回鞠智城跡「特別研究」成果報告会＠くまもと県民交流館パレア　2016/03/05

西海道における武具の生産・運用体制と鞠智城

明治大学文学部兼任講師　五十嵐 基善

はじめに －本研究の目的・視角－

◇ **鞠智城**は長期間にわたり維持された古代山城、大宰府を防衛する大野城・基肄城とは異なり、性格・機能をめぐっては不明な点が多い

➡ **鞠智城跡の発掘成果**による［**第Ⅰ期**］～［**第Ⅴ期**］の変遷【熊本県教委 2012a】

［第Ⅰ期］7 世紀第 3 四半期 ～ 7 世紀第 4 四半期　…［軍事施設］の機能
［第Ⅱ期］7 世紀末 ～ 8 世紀第 1 四半期前半　…［軍事施設］の機能
［第Ⅲ期］8 世紀第 1 四半期後半 ～ 8 世紀第 3 四半期　…［軍事施設］の機能
［第Ⅳ期］8 世紀第 4 四半期 ～ 9 世紀第 3 四半期　…［倉庫施設］の機能
［第Ⅴ期］9 世紀第 4 四半期 ～ 10 世紀第 3 四半期　…［倉庫施設］の機能

➡ 鞠智城は**軍事施設**として築城されたが、軍事的緊張が緩和されても廃城とされず、米穀を収蔵する**倉庫施設**に機能が変化したことが特徴

◇ **鞠智城内の施設**として、管理棟・八角形建物・兵舎・兵庫・米倉・貯水池などが確認・想定されている（発掘成果・文献史料より抽出）

➡ 鞠智城は本質的には軍事施設であるため、**武具**が収蔵されていたことが想定され、城内に**兵庫（武器庫）**が置かれていたと考えられる

➡ 特に、軍事的 9 世紀代に**兵庫（武器庫）**が確認でき、倉庫施設化との関係を明確にする必要がある

※ 本研究では、鞠智城の兵庫と武具を分析対象とし、長期的な性格・機能を明確にすることを試みる

[1] 鞠智城の兵庫について

鞠智城の建物は米倉を中心とする構成となるが、兵庫も全期を通して置かれていたと考えられる。大量の武具が収蔵されていたのかは別として、鞠智城の軍事機能が低下していく中でも放棄されなかった点が重要となる。

(1) 文献史料からみた鞠智城の兵庫

鞠智城に兵庫が置かれていたことは、**9 世紀代の文献史料**から確認することができる

➡ **計 4 件**の記事が確認でき、兵乱・凶事の前兆である**鳴動記事**として登場する

・天安 2 年（858）閏 2 月：「肥後国言、**菊池城院兵庫鼓**自鳴。」
・天安 2 年（858）閏 2 月：「又鳴。」
・天安 2 年（858）6 月：「大宰府言…又肥後国**菊池城院兵庫鼓**自鳴。」
・元慶 3 年（879）3 月：「又肥後国**菊池郡城院兵庫戸**自鳴。」

※ 倉庫施設として機能する［第Ⅳ期］・［第Ⅴ期］に相当する時期、築城当初から兵庫が置かれていたことが想定される

(2) 発掘成果からみた鞠智城の兵庫

歴史公園鞠智城に復元される**板倉**は、第1回鞠智城跡保存整備検討委員会（2000年7月）において復元方針が決定【熊本県教委 2012b】

- ➡ 対象となる**5号建物跡**は、考古学的には米倉とするのが妥当、兵舎（16号建物跡）との関係から武器庫とすることも可能、最終的には**武器庫と限定しない板倉**として復元
- ➡ しかし、武器庫は**低床**の方が効率的であるため、全期を通して検出される**掘立側柱建物**の中に兵庫があった可能性（5号建物は高床となる掘立総柱建物）
- ※ **鞠智城の兵庫の位置・棟数は不明であるが、文献史料の記載もふまえると、鞠智城には築城当初から兵庫が置かれていたと考えられる**

[2] 鞠智城の機能に関する再検討

鞠智城の機能として、[1] 有明海防衛・[2] 大宰府の支援・[3] 隼人支配の拠点とする見解が提示されている【坂本 1937】。しかし、鞠智城の築城目的は、菊鹿盆地の生産力を背景とした兵站能力の構築にあり、兵站機能に特化した古代山城であった可能性がある。倉庫施設に転用された点も、菊鹿盆地の生産力が行政的に重要であったことを意味する。

(1) 鞠智城の築城目的

鞠智城は白村江敗戦後に築城されたため、**対外防衛問題**との関係を想定する必要がある

- ➡ **有明海防衛**に関して、鞠智城から直接視認できないこと、干満の差による航行上の理由から否定的な見解【木村 2014】、古代山城の配置から**熊本県域の防衛は意識されず**
- ➡ **菊鹿盆地**は生産力が高いため、米穀を効率的に収蔵することが可能【佐藤 2010】、鞠智城は菊鹿盆地の生産力を兵站機能に編成することが目的
- ※ **鞠智城は兵站機能（軍粮）に特化した古代山城、標高が低いことなどが問題とされるが、古代山城の性格・機能には多様性を想定することが重要**

(2) 8世紀前半の鞠智城

鞠智城の兵站機能が発揮される状況は限定され、長期的には**潜在化**していくことになる

- ➡ 鞠智城の兵站機能は**大宰府方面**を意識して構築、実際には**対隼人の軍事行動**に発揮されたが、対隼人問題の軍事的緊張は短期間で解消に向かう
- ➡ **対外防衛問題**は形式化・形骸化が進み、大宰府方面の防衛体制でさえ弛緩していき、鞠智城の兵站機能は維持されなくなっていく
- ※ **鞠智城の第Ⅲ期は停滞期とされ、対外防衛問題の形式化と連動した現象であり、計画的な米穀の収蔵は放棄に近い形になっていたことが想定される**

(3) 鞠智城の倉庫施設化

西海道の軍事的緊張は緩和傾向にあるが、鞠智城は廃城とされずに**維持**されたことが特徴

- ➡ **第Ⅳ期の機能再開**は、兵站機能の強化であったとは考え難く、**米穀の行政的利用**が目的であったと考えられる（契機となった出来事は不明）
- ➡ ただし、米穀を収蔵していることは、軍事的利用・行政的利用が可能であることを意味する（第Ⅰ期～第Ⅲ期：行政的利用可能、第Ⅳ期以降：軍事的利用可能）

※ 鞠智城の築城・維持は、菊鹿盆地の生産力との関係で説明でき、当初は軍事目的(兵站機能)であったが、行政目的に重心を移していったことが特徴

[3] 西海道における武具の生産体制 ー天平宝字5年以前ー

天平宝字5年(761)以前、九州地方の武具生産は大宰府を主体とし、鞠智城に武具が輸送されていた可能性がある。しかし、鞠智城の機能が軍粮の出給であるならば、大量の武具を収蔵し続ける必要はない。兵庫が置かれ続ける点に関しては、施設警備用の武具が収蔵されていた可能性がある。特に、第Ⅲ期の機能低下は、大量の武具が存在していなかったことを裏付ける。

(1) 大宰府・西海道諸国の生産体制

天平宝字5年以前、九州地方における武具生産は、**大宰府**を主体とする体制として整備

➡ **大宰府の武具生産**は、天平8年(732)の「薩麻国正税帳」にみえるように、管内諸国からの**材料徴収**により機能(工人の派遣なども想定される)

➡ **管内諸国**では年料器仗制は施行されないが、武具の生産・修理能力は保有しており、大宰府の統制を受けながら**武具生産**を行なっていた可能性【松本 1983・津野 2007】

※ 鞠智城に収蔵された武具は、①大宰府製作分の輸送、②現地保有・製作分の収蔵、により成立していた可能性

(2) 鞠智城と武具の関係

天平宝字5年以前は鞠智城の**第Ⅰ期～第Ⅲ期**に相当、**兵站機能**が意識されていた時期

➡ 当初は武具の収蔵が意識されたが、長期的には**縮小**していったことが想定される

…[**物資消費**] 対隼人の軍事行動・藤原広嗣の乱による大規模な消費

…[**防衛意識**] 正面は**対馬嶋・壱岐嶋・大宰府方面**、有明海に対する低い防衛意識

…[**武具配備**] 軍事力の配備は、**国府・郡家・軍団**に重心を置いた体制

…[**武具修理**] 現状、鞠智城跡からは**鍛冶遺構**は未検出(鞴羽口・鉄滓は出土)

※ 鞠智城に兵庫が置かれ続ける理由として、施設警備用の武具を収蔵する必要があったことが想定され、基礎的な大刀・弓箭具が置かれていた可能性がある

[4] 西海道における武具の生産体制 ー天平宝字5年以降ー

天平宝字5年(761)、西海道に年料器仗制が導入されるが、停滞期にあった鞠智城との関係は皆無である。第Ⅳ期以降の鞠智城は、軍事機能を発揮する状況にはなく、施設警備用の武具は別として、武具を収蔵する必要はなくなっていく。また、9世紀中期にみえる鼓は、軍事用途の指揮具ではなく、門の開閉などの管理・運営に使われたことも想定できる。

(1) 西海道の年料器仗制

天平宝字5年(761)、西海道に**年料器仗制**が導入される(他地域:8世紀初頭に導入)

➡ 筑前・筑後・肥前・肥後・豊前・豊後・日向の**計7国**が対象、武具の**計画生産**が開始される(製作品目:兵員の基本装備、甲・大刀・弓・征箭・胡籙)

➡ しかし、年料器仗の**製作数量は少なく**、肥後国では[甲]4領・[大刀]10口・[弓]20張・[征箭]40具・[胡籙]40具となる

※ 当該期は停滞期の第Ⅲ期に相当し、武具を収蔵しているとは考え難く、年料器仗制が鞠智城に与えた影響は皆無である

(2) 9世紀における兵庫と鼓の性格

第Ⅳ期以降、鞠智城は軍事機能を発揮する状況はなく、施設警備用以外の武具は不要

➡ 9 世紀中期の鼓は兵庫に置かれていることから、集団戦闘に必要な指揮具として理解できるが、当該期の鞠智城に配備されていることは不自然な印象

➡ 鼓は音を発生することから、宮城門の開閉、時刻を知らせる際に鳴らされ、軍事用途に限定されないことにも着目する必要

※ 鞠智城には兵員の駐屯はないため、指揮具を配備しておく必要はなく、9 世紀中期の鼓は門の開閉・来城者の合図などに使用されていた可能性がある

おわりに

◇ 平成 26 年度鞠智城跡「特別研究」において、報告者は研究課題「西海道の軍事環境からみた鞠智城の機能」を設定

➡ 鞠智城の機能として籠城機能・兵站機能を想定し、軍事機能は潜在化していったことを指摘したが、第Ⅳ期の機能再開に関する説明が不十分

➡ 近年、維持された古代山城の評価として、緊急事態を意識しつつ、米穀を収蔵する倉庫施設として機能した見解が提示【石松 2007 など】

➡ 本研究では、鞠智城と菊鹿盆地の生産力との関係を重視、大量の武具を必要としない環境であったことを指摘した

◇ 鞠智城跡の発掘成果をふまえ、鞠智城の長期的な展開を整理すると以下のようになる

[第Ⅰ期] 菊鹿盆地の生産力 ➡ 軍粮の効率的な確保 ➡ 収蔵施設の設置 ➡ 兵站機能に特化した鞠智城の成立

[第Ⅱ期] 建物の耐久年数 ➡ 文武 2 年（698）の改修 ➡ 鞠智城を維持する意識 ➡ 鞠智城の兵站機能が重視

[第Ⅲ期] 天平期の節度使体制 ➡ 建物の小型礎石化 ➡ 建物の耐久性向上 ➡ 対外防衛意識の弛緩 ➡ 機能低下

[第Ⅳ期] 米穀の行政的利用 ➡ 機能再開 ➡ 建物の大型礎石化 ➡ 新羅海賊問題との関係は希薄 ➡ 第Ⅴ期も倉庫施設として機能

◇ 鞠智城が維持された理由は、菊鹿盆地の生産力を軍事利用・行政利用する点に集約

➡ 白村江敗戦による軍事危機において、鞠智城は軍粮の確保・出給を任務としており、文献史料に登場はしなくても、国家を守るために極めて重要な役割を果たしていた

➡ 菊鹿盆地の高い生産力は、古代九州の支配において不可欠な存在であり、鞠智城を通して国家防衛・地域行政を支えていた

【参考文献】紙幅の関係により省略、論文集に記載した参考文献を参照

【論文要旨】

西海道における武具の生産・運用体制と鞠智城

五十嵐基善

鞠智城は長期間にわたり維持されたが、大宰府を防衛する大野城・基肄城とは異なり、性格・機能をめぐっては不明な点が多い。鞠智城跡の発掘成果によると、当初は軍事施設としての性格を持つが、軍事的緊張が緩和されても廃城とされず、米穀を収蔵する倉庫施設に変化していったことが指摘されている。しかし、鞠智城内の施設をみると、全時期を通して兵庫（武器庫）が想定でき、武具の収蔵との関係を明確にしなくてはならない。

鞠智城の兵庫は、9 世紀代の文献史料に確認でき、築城当初から設置されていたと考えられる。しかし、発掘により兵庫を特定することは困難であり、位置・棟数を明確にすることはできない。兵庫は低床の方が効率的であるため、側柱建物を候補として挙げることができる。掘立側柱建物は全時期を通して検出されており、これらの中に兵庫があったことが想定される。

兵庫と武具の関係は、鞠智城の機能に直結する論点である。鞠智城の築城目的は、菊鹿盆地の生産力を兵站能力に編成する点に求められる。鞠智城の機能は軍粮の確保・出給にあり、兵站機能に特化した古代山城として理解できる。対外防衛意識の弛緩により機能が低下するが、8 世紀後期に倉庫施設として機能が再開する。軍事的問題に起因していたとは考え難く、菊鹿盆地の生産力が行政的に重視された措置であると評価できる。

鞠智城は米穀の収蔵が目的であり、軍事的利用から行政的利用に重心を移していく。そのため、全体的には大量の武具を収蔵する必要は低く、当初は武具の収蔵が意識されていたとしても、長期的には縮小していったと考えられる。兵庫が置かれ続けた理由として、施設警備に必要な武具を収蔵することが目的であった可能性がある。また、9 世紀中期にみえる鼓は、集団戦闘に必要な指揮具ではなく、門の開閉・来城者の合図など、管理・運営に使用されていた選択肢も提示できる。

鞠智城「特別研究」成果報告会

2016/3/5(sat)

鞠智城と東北の城柵官衙

東京大学大学院人文社会系研究科博士課程
井上　翔

はじめに

鞠智城の築城理由

・防衛政策　・対南九州　・外交政策　・在地社会への対応

城柵官衙遺跡→防御拠点であると同時に支配の拠点として官衙的性質を持つ

←奥羽越の国司の職掌「饗給、征討、斥候」

1、古代山城の中の鞠智城

No	種別	平面規格(間)		平面規模(m)		柱間寸法(m)	
		梁行	桁行	梁行	桁行	梁行	桁行
1	掘立柱	3	5	4.5	10	1.5	2
5	掘立柱	3	4	6.9	12	2.3	3
11	礎石・掘立柱	5	6	11	12.6		
12	礎石・掘立柱	5	6	11.5	13.2		
13	掘立柱	3	(4)	7.5	(10.8)	2.5	2.7
20	礎石	3	4	7.2	9.6	2.4	2.4
21	礎石	3	4	7.2	8.8	2.4	2.2
22	礎石	4	4	5.8	8	1.45	2
23	礎石	4	6	5.8	12.6	1.45	2.1
25	掘立柱	3	3	5.7	7.2	1.9	2.4
29	礎石・掘立柱	6	(3)	12.9	(6.9)		
36	礎石	3	4	7.5	8.8	2.5	2.2
38	掘立柱	(3)	(3)	(6)	(5.7)	2	1.9
40	掘立柱	(2)	5	(6)	15	3	3
42	掘立柱	(2)	(3)	(4.4)	6	2.2	2
43	掘立柱	(3)	(3)	(7.5)	(7.5)	2.5	2.5
45	礎石	(2)	4	5	7.5	2.5	2.5
46	礎石	3	4	6.6	8.4	2.2	2.1
47	礎石	3	3	6.9	7.5	2.3	2.5
48	礎石	(2)	(4)	(3.8)	(7.8)		
49	礎石	3	9	7.2	21.6	2.4	2.4
50	礎石	(2)	(5)	(3.9)	(8.25)	1.95	1.65
52	掘立柱	(2)	(1)	(6)	(4.5)	3	4.5
53	掘立柱	2	(1)	4.6	(3.3)	2.3	3.3
54	掘立柱	2	(1)	4.4	(3)	2.2	3
56	礎石	3	6	8	14.2	2.37	2.66
59	礎石	3	4	5.85	9	1.95	2.25
64	礎石	3	3	7.8	7.8	2.6	2.6
65	礎石	3	(3)	(4.5)	(6.8)	1.5	2.25
66	礎石	(3)	(4)				
67	礎石	(3)	(3)	(6.6)	(6.6)	(2.2)	(2.2)
69	掘立柱	(2)	(3)	(3.9)	(5.85)	1.95	1.95
70	掘立柱	(2)	(4)	(3.6)	(7.8)	1.8	1.95
72	礎石	3	4	6.3	8.4	2.1	2.1

表 1 総柱建物一覧表

○古代山城との相違点

・低丘陵&平坦面に建物群

・溝、柵列によって区画された院構造をとる「庭」空間の存在

・7間以上の長舎建物の割合

・大野城、基肄城にみえる5×3間の倉庫の少なさ

○古代山城との共通点

・低丘陵だが山上に立地

・土塁や石垣による区画施設

→城門や土塁線が防御的な機能を有していたであろうことは間違いない一方で政庁的空間が存在し、他の山城と異なり、官衙的機能も有しており、そのような複合的な機能を有していたといえる。

2、東北の城柵官衙について-郡山遺跡と秋田城を中心に-

○郡山遺跡第Ⅰ期官衙遺跡

・宮城県仙台市太白区郡山に立地

・二時期に変遷（第1期が真北に対して東に振れる、第2期は正方位）

・中枢施設、倉庫群、雑舎群、工房群

○7世紀後半の東北政策

史料1　『日本書紀』斉明四年（658）四月条

夏四月、阿陪臣〈闕レ名〉、率二船師一百八十艘一伐二蝦夷一。齶田・渟代二郡蝦夷望怖乞レ降。於レ是勒軍陳船於齶田浦。齶田蝦夷恩荷進而誓曰。（中略）仍授二恩荷一以二小乙上一、定二渟代・津輕二郡々領一。遂於二有間浜一召二聚渡嶋蝦夷等一大饗而帰。

No	種別	平面規格(間)		平面規模(m)		柱間寸法(m)	
		梁行	桁行	梁行	桁行	梁行	桁行
2	掘立柱	1	3	2.4	4.2	2.4	1.4
3	掘立柱	2	3	6	9	3	3
6	掘立柱	3	6	6	16.4	2	2.4
7	掘立柱	3	(4)	6.3	(8.4)	2.1	2.1
8	掘立柱	3	6	6	10.2	2	1.7
9	掘立柱	2	(3)	6	(7.5)	3	2.5
10	掘立柱	2	3	6	7.5	3	2.5
14	掘立柱	3	5	7.2	14.5	2.4	2.9
15	掘立柱	3	(4)	7.2	(11.6)	2.4	2.9
16	掘立柱	3	10	7.8	26.5	2.6	2.65
17	掘立柱	3	(6)	7.2	(13.25)	2.4	2.65
18	掘立柱	3	(8)	8.1	(20.8)	2.7	2.6
19	掘立柱	1	5	6.3	15	6.3	3
24	掘立柱	1	(4)	5.7	(10.2)	5.7	2.55
26	掘立柱	3	(2)	7.2	(6)	2.4	3
27	掘立柱	1	(4)	5.7	(10)	5.7	2.5
28	掘立柱	2	5	4.2	9	2.1	1.8
41	掘立柱	2	(3)	7	(9)	3.5	3
55	掘立柱	2	4	6	9.6	3	2.4
57	掘立柱	2～3	6	5.7	10.2	1.8～1.95・2.85	1.5～1.8
58	掘立柱	(1)	5	(4.2)	13.5	4.2	2.7
60	掘立柱	3	8	5.4	16.8	1.8	2.1
61	掘立柱	3	7	5.4	14.7	1.8	2.1
62	掘立柱	(1)	(6)	(1.95)	(11.7)	1.95	1.95
63	掘立柱	3	7	5.85	16.8	1.95	2.4

表 2 側柱建物一覧表

史料2『日本書紀』斉明四年（658）七月甲申条

秋七月辛巳朔甲申。蝦夷二百余詣レ闕朝献。（中略）授二都岐沙羅柵造〈闕レ名〉位二階一。判官位一階。授二渟足柵造大伴君稲積小乙下一。

国名	城柵名	比定遺跡	備考
陸奥	徳丹城	徳丹城跡	
	中山柵		
	志波城	志波城跡	
	胆沢城	胆沢城跡	
	覚鰲城		
	伊治城	伊治城跡	
	桃生城	桃生城跡	
	色麻柵	城生遺跡？	天平五柵
	牡鹿柵	赤井遺跡？	天平五柵
	新田柵	新田柵跡推定遺跡	天平五柵
	玉造柵	名生官衙遺跡Ⅳ期	天平五柵
	多賀城	多賀城跡	
		郡山遺跡第Ⅱ期官衙遺跡	
		郡山遺跡第Ⅰ期官衙遺跡	
出羽	出羽国府	城輪柵跡	
	由理柵		
	雄勝城	払田柵跡？	第二次雄勝城？
	秋田城	秋田城跡	
	出羽柵		秋田城遷居前
越後	都岐沙羅柵		
	磐舟柵		
	渟足柵		

表 3 城柵官衙一覧表

史料3　『日本書紀』斉明四年(658)是歳条

是歳、越邦守阿部引田臣比羅夫、討二粛慎一。献二生羆二・羆皮七十枚一。（中略）或本云、至二庚申年七月一、百濟遣レ使奏言、大唐・新羅并レ力伐レ我。既以二義慈王・王后・太子一為レ虜而去。由レ是国家以二兵士甲卒一陣二西北畔一。繕二修城柵一断二塞山川之兆一。

史料4　『日本書紀』斉明五年(659)三月是月条

是月、遣二阿倍臣一〈闕レ名〉。率二船師一百八十艘一討二蝦夷国一。阿倍臣簡集二飽田・渟代二郡蝦夷二百四十一人、其虜卅一人、津輕郡蝦夷一百十二人、其虜四人、胆振鉏蝦夷廿人於一所一而大饗賜レ禄。（中略）授道奥与レ越国司位各二階、郡領与二主政一各一階。或本云、阿倍引田臣比羅夫。与二粛慎一戦而帰。献二虜卅九人一。

史料5　『日本書紀』斉明六年（660）三月条

三月、遣二阿倍臣一〈闕レ名〉。率二船師二百艘一伐レ国。阿倍臣以二陸奥蝦夷一令レ乗二己船一到二大河側一。（後略）

史料６　『日本書紀』斉明六年（660）五月是月条
是月。（中略）又阿倍引田臣。〈闕レ名〉。献二夷五十余一。又於二石上池辺一作二須弥山一。高如二廟塔一。以饗二粛慎卅七人一。

→城柵を拠点とした東北遠征。太平洋側と日本海側両方からの遠征。日本海側は渟足柵、太平洋側は郡山遺跡第Ⅰ期官衙。

○秋田城跡
秋田城の初見史料
史料７　『続日本紀』天平五年（七三三）二月己未条
十二月己未。出羽柵遷二置於秋田村高清水岡一。

・秋田県秋田市、旧雄物川の河口付近である高清水丘陵上に立地
・築地塀あるいは材木塀による外郭区画施設
・内部に国庁規模の政庁区画
・東門南東方向には、鵜ノ木地区と呼ばれる有名なトイレ遺構を検出した遺構群
・木簡や漆紙文書といった多数の出土文字資料

→①外郭施設、②外郭施設の櫓状の建物、③国庁規模の政庁、④地区ごとに分類された官舎群
→文書行政・軍政・外交・交易といった機能

３、鞠智城と東北の城柵
⑴行政機能
史料８　鞠智城跡出土第一号木簡

「＜秦人忍□〔米カ〕□五斗」　134×26×5

→①貢納負担者が秦人忍であるということ、②鞠智城にまで運搬した人間が存在すること（①と同一人物の可能性もある）、③納入された物品の確認を行う役職の人物、④米を消費する人（兵士か）

⑵軍事機能
史料９　宮城県・多賀城跡出土第一号漆紙文書
］九日尽　］月十□〔八カ〕日合十箇日
宝亀十一年九月廿［
行方団□毅上毛野朝［

史料 10　宮城県・多賀城跡出土第六号漆紙文書

・　［　　］

］合十箇日□□粮請［

］應元年五月九日□□（書生ヵ）［

書生生部益人

（別筆ヵ）「十三日

］掾安倍朝臣［

］真□（自署ヵ）」

（漆面略）

→兵舎（16 号建物）の存在＝管理する人間の存在

史料 9・10 多賀城での国司に対する公粮請求文書、城司制の可能性

(3)外交機能

・八角形建物

・百済系仏像の出土

・山城の造営技術等より朝鮮半島の影響

おわりに

古代山城との相違点、城柵との共通点を多く抽出

城柵官衙→古代国家の東北政策の繁栄

鞠智城に古代国家がどのような役割を期待していたのか

→一義的には防御機能（防御とは純軍事的な意味のみならず地方豪族の懐柔、威圧という意味も＜五百旗頭真氏の指摘＞）、7 世紀末の整備（全国的な官衙の整備と南九州に対する政策の一環）

＜参考文献＞

今泉隆雄　1986　「蝦夷の朝貢と饗給」『古代国家の東北辺境支配』吉川弘文館、2015

今泉隆雄　1990　「古代東北城柵の城司制」同右書

今泉隆雄　2005　「古代国家と郡山遺跡」同右書

葛原克人　1994　「朝鮮式山城」佐藤宗諄編集『日本の古代国家と城』新人物往来社

熊本県教育委員会　2010　『古代山城　鞠智城を考える』山川出版社

熊本県教育委員会　2012　『古代山城　鞠智城を考えるⅡ』

熊本県教育委員会　2014　『鞠智城シンポジウム二〇一三成果報告書』

平川南　2014　「出羽国府と渤海国」『律令国郡里制の実像』上、吉川弘文館

平川南　2014　「秋田城跡漆紙文書からみた出羽国府論」『律令国郡里制の実像』上、吉川弘文館

山中敏史　2007　『古代官衙の造営技術に関する考古学的研究　平成 15 年度～平成 18 年度科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書』

渡辺正気　1988　「神籠石の築造年代」斎藤忠先生頌寿記念論文刊行会『考古学叢考』中、吉川弘文館

『鞠智城と古代社会』1～3、2013～2015

鞠智城と東北の城柵官衙

井上　翔

鞠智城が古代山城の一つだが、西日本に多く分布する古代山城とは大きく異なっている。そのことが大きな問題提起となって、これまで鞠智城に関して様々な論点が提示される要因でもあった。複合的な性格の有するあり方は、東北の城柵官衙遺跡に類似しており、東北の城柵官衙遺跡の場合古代国家の辺境政策の特質を繁栄しているため、鞠智城についても同様のことが指摘できるのではないだろうか。

鞠智城は、比較的低い丘陵状の場所に立地し平坦面を有している。区画施設を伴い「庭」を形成すると考えられるＬ字型に配置される政庁的な空間と考えられる。城内施設には、長舎建物が多く、倉庫群主体とする大野・基肄両城とは大きく異なる。また倉庫群についても大野・基肄両城は、規格性の高い建物が多いのに対し、鞠智城は、規格性に乏しく在地的な性格を有している点があげられる。

城柵官衙の基本的な構造としては、①外郭施設、②外郭施設の櫓状の建物、③国庁規模の政庁、④地区ごとに分類された官舎群といった要素が抽出できる。機能としては、一般行政機構としての文書行政、番上勤務する兵士を管理・統率する軍政、蝦夷を懐柔するための饗宴と禄物の支給といった外交的な機能等が挙げられる。

これら城柵の特徴は、鞠智城の場合も一致する場合が多い。木簡や円面硯の出土等より一般的な官衙と同様に文書行政が、兵舎の存在から軍政、菊池川流域に立地し、対外交渉において重要な位置を占めていた可能性などがあげられる。

築城の時期よりその要因が対外関係にあることは間違いないが、城内施設が充実するのは７世紀末以降と考えられており、全国的な官衙の整備時期と一致し、九州では南九州に対応する政策が実施される時期でもあり、城柵官衙と類似した構造をとるのは、東北の城柵が蝦夷に対するものであったのと同様に鞠智城も南九州に対応するためのものではなかっただろうか。

消費者から見た須恵器の流通―鞠智城・官衙・周辺集落の比較検討を通して―

太田智(福岡大学大学院博士課程前期)

1，はじめに

須恵器→轆轤成形，登り窯での焼成など→高度かつ熟練した技術を支える様々なシステム

・**生産**:3～7 世紀の陶質土器・須恵器工人集落に 6 つの類型→様々な生産システムを示す→筑前牛頸窯跡群でも，同時期での生産システムの多様性を確認(太田 2016)

・**流通**:鞠智城出土須恵器の流通範囲(木村 2012),牛頸窯跡群(田尻・石川 2008)，刈又窯跡群での検討(小郡市 1996)。→しかし,周辺遺跡の流通状況や,遠隔地で生産された須恵器がどのように消費地へ運ばれたなど,不明な点は多い。

→以上の問題意識から、**「須恵器がどのように運ばれたのか」**に注目。

2，研究の視点と方法

(1)同一時焼成品と同一工房製品の概念規定

・同一時焼成品:同じタイミングで焼成された製品の一群

・同一工房製品:同じ工房で製作された製品の一群

(2)同一工房製品・同一時焼成品の認定条件

・須恵器の細部形態　・底部内面,天井部外面の調整　・底部外面,天井部内面の不定方向ナデ　・胎土の観察　・ヘラ記号　・色調,降灰　など

以上の観察項目を基に，認定基準を設定し，各資料に当てはめる。

図 1　同一工房製品・同一時焼成品の認定条件

3,同一工房製品・同一時焼成品の抽出

(1)同一工房製品の抽出

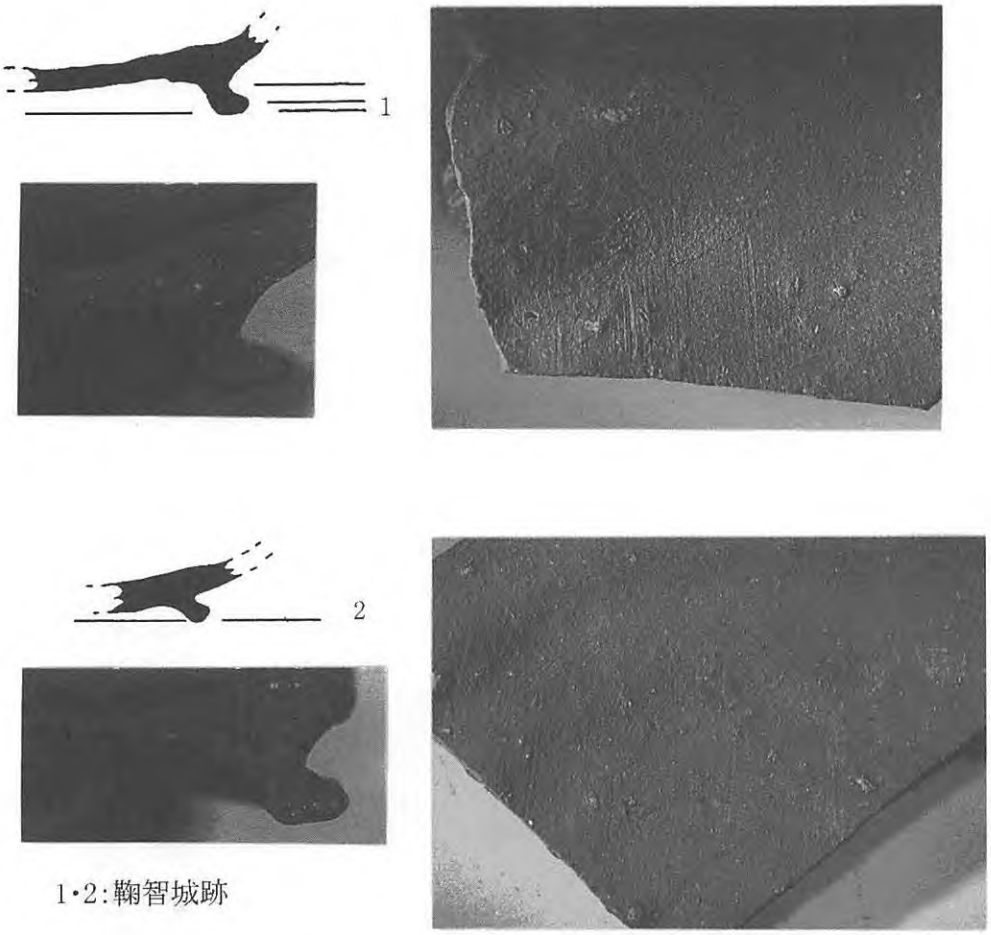
・椀

・ｄａ型:鞠智城出土の 2 点　・ｅａ型:伊坂東原遺跡出土品　・ｂｂ型:鞠智城出土品 2 点とうてな遺跡の 1 点？　・ｇａ型:伊坂東原遺跡出土の 2 点

・かえりのない蓋

・前畑遺跡の 2 点　**→遺跡ごとでのまとまり**

(2)同一時焼成品の抽出:伊坂東原遺跡のセット　**→遺跡ごとでのまとまり？**



1・2:鞠智城跡

図 2　同一工房製品の一例(縮尺不同)

4,考察

(1)8 世紀代の鞠智城周辺の須恵器流通状況

7 世紀の周辺遺跡の様相は,現状で不明な部分が多い。しかし 8 世紀代の集落では,少なくとも牛頸,荒尾,宇城窯跡群から須恵器が供給される点は明らかである。八女産須恵器についても,同様に確認できる可能性が非常に高い。

→鞠智城との間に流通範囲上での明確な違いはない。

(2)同一工房製品,同一時焼成品と鞠智城の須恵器流通の特徴

・同一工房製品,同一時焼成品の希薄さ⇔(参考)古墳出土須恵器の状況

→つまり,焼成時の一括性を保ったまま消費地に運ばない場合が非常に多い

・ヘラ記号の存在→現状では複数の記号が確認できるが、ヘラ記号の存在や有無は、須恵器製作集団の違い(中村 1977 など)。

・生産システムの多様性→牛頸窯跡群 6～7 世紀代は，複数の生産システムの集合体(太田 2016)。

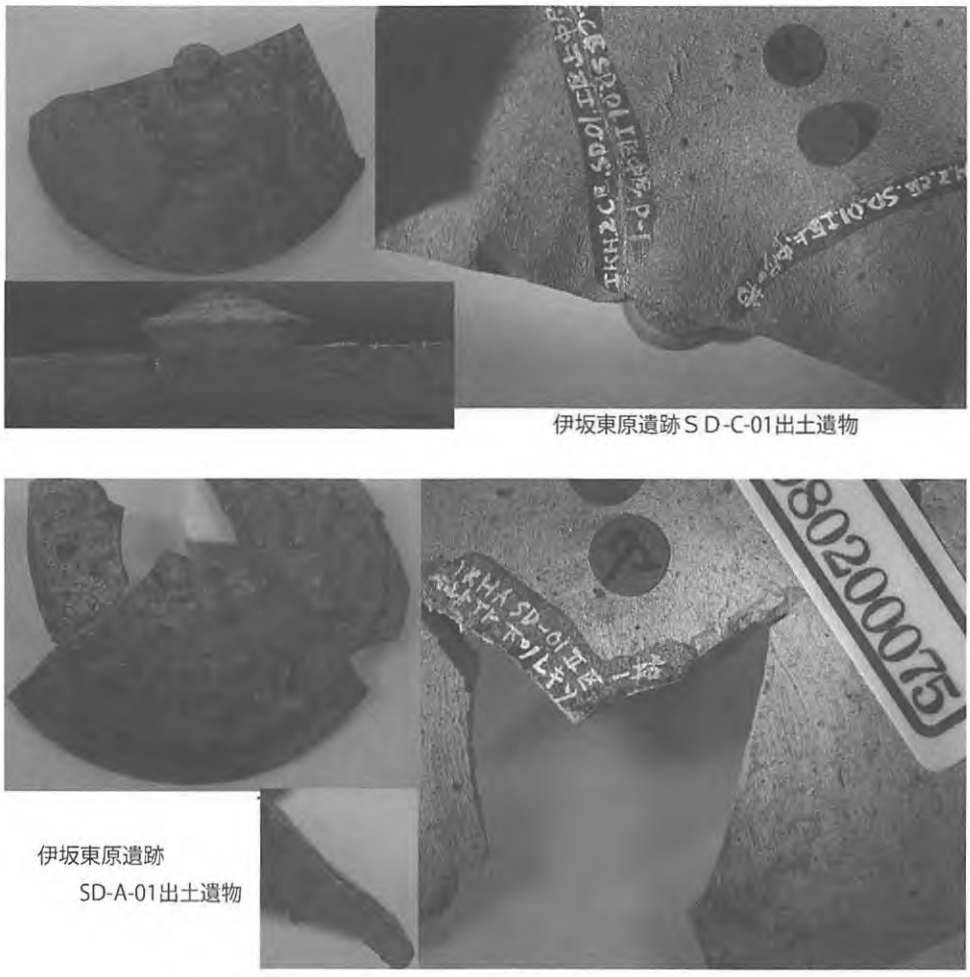


図３　同一時焼成品の一例

→鞠智城では,様々な生産システムの下で生産された製品が運ばれる。また,消費地と生産地まで遠距離なので,窯元それぞれが須恵器を運ぶとは考えられない。

→一度窯跡群レベルでの集積

・韓国 高霊主山城出土陶質土器の状況→同一時焼成品と同一工房製品の割合が高い→近隣の窯からの調達

→以上から,様々な生産システムを持つ生産集団がそれぞれで須恵器を生産→窯跡群レベルでの集積→一部は鞠智城へ運ぶと考えられる

5,まとめ

①少なくとも集落と鞠智城に搬入される須恵器の生産地は、8 世紀代では同じ　②単一遺跡で出た須恵器には,同一工房製品や、同一時焼成品が含まれるが，明らかに少数。 ③様々な生産システムを持つ窯跡の製品が搬入される。④鞠智城と生産地との距離関係を参考にすると、各生産システムを持つ窯元の完成品を窯跡群単位で集めて保管、出荷すると考えられる。

(参考文献)
太田智 2016「日韓土器工人集落の研究-須恵器・陶質土器を中心に-」『第 27 回東アジア古代史・考古学研究会交流会　研究発表資料集』
小郡市教育委員会 1996『苅又地区遺跡群Ⅴ』小郡市文化財調査報告書　第 106 集
木村龍生 2012「鞠智城出土の土器について」『鞠智城跡Ⅱ-鞠智城跡第 8～32 次調査報告』熊本県文化財調査報告第 276 集　熊本県教育委員会
田尻義了・石川建 2008「ヘラ記号から見た須恵器の流通範囲」『牛頸窯跡群-総括報告書Ⅰ-』大野城市文化財調査報告書　第 77 集
中村浩 1977「須恵器生産に関する一試考-和泉陶邑窯における陶工組織について-」『考古學雑誌』第 63 巻第 1 号　日本考古學會

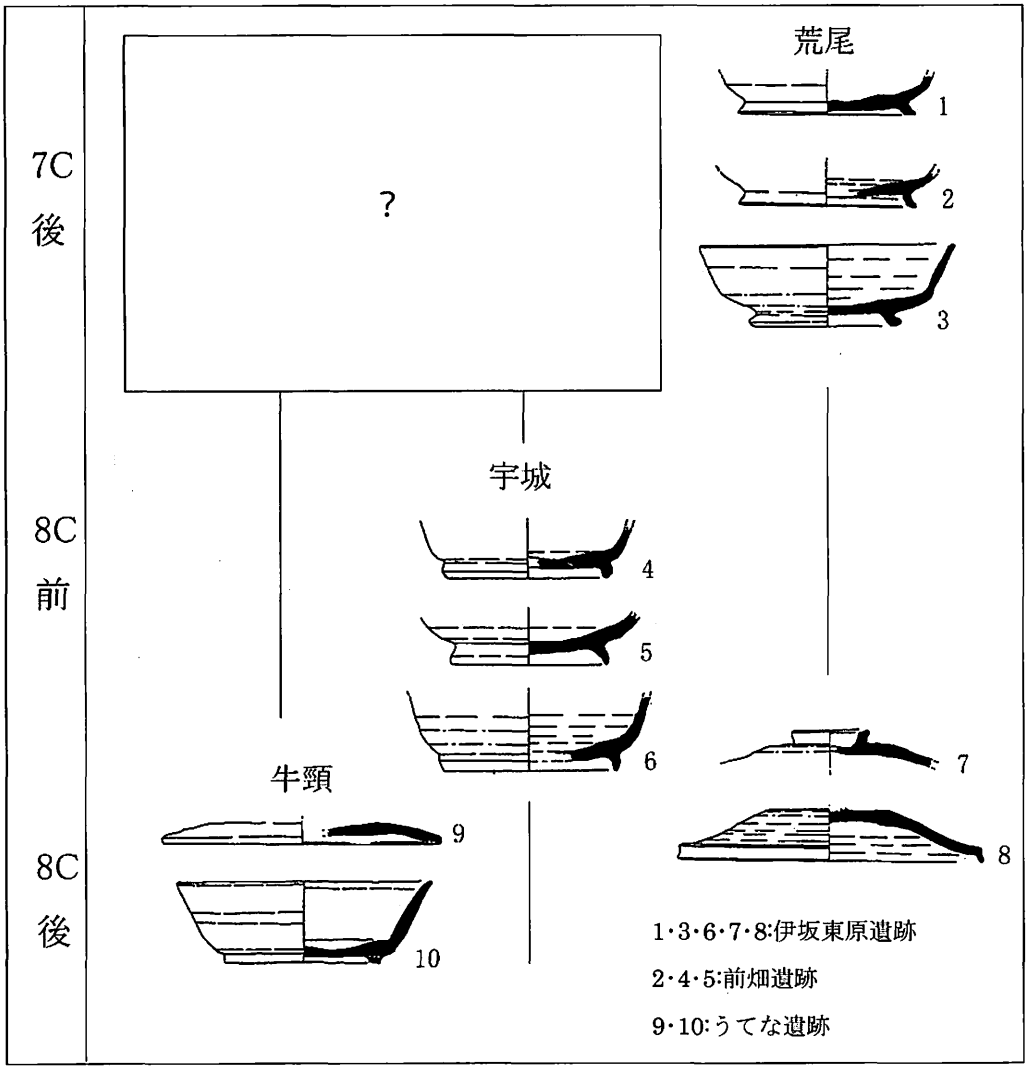


図 4　鞠智城および周辺遺跡での須恵器の流通状況

【論文要旨】

消費者から見た須恵器の流通

―鞠智城・官衙・周辺集落の比較検討を通して―

太田　智

還元焔焼成によって、硬質堅致で青灰色という従来にない特徴を獲得した須恵器は、戦後の編年研究を経て、現在では様々な視点から研究されている。

このうち流通に関する研究では、流通「範囲」に関する問題は近年明らかになりつつあり、鞠智城でも、牛頸・八女・荒尾・宇城窯跡群から製品が運ばれた点が解明された。しかし、流通とは製品が生産者の手元から離れ、消費者の手元に渡るまでの諸現象を指すため、流通範囲のみでは解決できず、新たな視点の開拓が望まれる。この点、鞠智城では遠隔地で生産された須恵器がどのように消費地へ運ばれたかが不明で、周辺遺跡との比較も含め検討し解明できれば、生産者と消費者との関係の解明が期待できる。

以上の問題意識から、「須恵器がどのように運ばれたのか」を明らかにするため、同じ工房で生産された製品の一群を指す同一工房製品、同じ時間に同じ窯で焼かれた製品を指す同一時焼成品の概念を用いて、鞠智城と周辺遺跡を対象に検討した。

その結果、①各遺跡とも同一工房製品と同一時焼成品が確認できるが、ごく少数なため、窯出し直後の一括性や、同じ工房の製品のまとまりを保たない ②同一工房製品と同一時焼成品は、一つの遺跡範囲内でのみ確認でき、別の遺跡では今のところ確認できない点が明らかになった。さらに、③鞠智城以外の遺跡でも牛頸・宇城・荒尾産須恵器が確認できるため、鞠智城との間で流通範囲上の明確な違いは認められない点も明らかになった。

そして、供給地の牛頸窯跡群の工人集落の状況と、鞠智城での須恵器の形態の違いやヘラ記号の多様性から、それぞれで違う生産システムを持つ窯元の生産品が搬入されており、窯出し直後のセット関係をほぼ保たず、消費地と生産地が遠距離なため、窯元単位での製品の搬入ではなく、窯出し後に窯跡群レベルで集積過程を経て、出荷し、鞠智城へ運ばれると想定した。

鞠智城築造前後の軍備

九州国立博物館　　小嶋　篤

はじめに

研究視点１：大宰府と鞠智城の対比

研究視点２：「軍備」から鞠智城の実像を探る

具体的には、「①兵器の確保、②備蓄兵器の実態、③兵器の運用」を検討。

１．鞠智城築城前後の兵器生産

（１）大宰府の冶金工房

・多系統の技術保有集団が大宰府都城の建設・整備に従事。

・大宰府政庁周辺に大規模な「律令的複合冶金工房」が存在。

※律令的複合冶金工房：鍛冶・鋳造・漆工等の異業種工人の協業で運営された工房。

公的権力に基づく物資の安定的集積を基盤に成立する。

↓

←『日本書紀』天武 14 年（685 年）11 月甲辰条

筑紫大宰への「鉄一万斤、箭竹二千本」（兵器素材）の輸送記事。

筑紫大宰の要請に基づき、西海道の律令的複合冶金工房で兵器生産を実施。

←律令的複合冶金工房の代表例となる飛鳥池遺跡では、木簡・様から兵器生産要請が実証されている。

（２）鞠智城城内の冶金工房

・谷部堆積層での鉄滓出土量が少なく、冶金工房の存在は認められるが、生産規模は小さい。

※貯木施設・漆付着土器の存在から、鞠智城Ⅰ期に小規模な「律令的複合冶金工房」が操業されたと見られる。

（３）鞠智城城外の冶金工房

・律令的複合冶金工房を特徴づける「溶解」技術の普及過程。

２．鞠智城築造前後の兵器

（１）鞠智城の兵器

考古資料：鑿箭式長頸鏃　　文献史料：鼓

（２）奈良時代以前の備蓄兵器

①大宰府政庁周辺官衙跡出土品（7 世紀後半～8 世紀中頃を主体とした兵器群）

・弓（両頭金具）

両頭金具：古墳時代後期（6 世紀）に流行した弓金具。

・矢（鉄鏃）

刃部先端の形式は、鑿箭式と片刃箭式を中心に柳葉式・三角形式が加わる。

西海道の鉄鏃組成を特色づける飛燕式や圭頭式を含まない（現状で）。

・甲冑（小札）

札幅が 1.0 前後になる小札甲も含み、希少価値の高い武具も備蓄。

※大宰府政庁周辺官衙跡出土品は有機質部材が消失しており、「情報」の欠落がある。

②小郡官衙遺跡出土品（7 世紀後半を主体とした鉄鏃群）

・矢（鉄鏃）

刃部先端の形式は、鑿箭式 67 点、片刃箭式 31 点、三角形式 4 点、平根系鉄鏃 2 点。

西海道の鉄鏃組成を特色づける飛燕式や圭頭式を含まない。

③東大寺正倉院宝物（7 世紀後半から 8 世紀を主体）

・矢（「下毛野奈須評」銘あり）

鉄鏃 3,542 点、竹鏃 192 点、骨鏃 44 点、角鏃 3 点を含む 3,800 点余で構成。

鉄鏃の刃部形式は、尖根系長頸鏃が鑿箭式 2,472 点、片刃箭式 759 点、三角形式 96 点。

平根系鏃が方頭式 189 点、三角形式 26 点、飛燕式 2 点。

※奈良時代に備蓄された矢（鉄鏃）を比較すると・・・
大宰府政庁周辺官衙跡出土品・小郡官衙遺跡出土品・東大寺正倉院宝物の三者が、
いずれも 7 世紀後半の製品を含み、かつ型式と形式組成・比率が類似する状況にある。

（3）肥後国の鉄鏃

①古墳時代中期前半（5 世紀前半）

在地形式の圭頭式と広域共有形式の柳葉式の併存。

新来の柳葉式短頸鏃も一部で保有。

②古墳時代中期後半（5 世紀後半）

柳葉式長頸鏃と片刃箭式長頸鏃を主軸に、圭頭式鏃等が加わる。短頸鏃は激減。

ヤマト王権下の領域では、上位階層墓を中心に片刃箭式長頸鏃を多量に保有する傾向。

③古墳時代後期前半（6 世紀前半）

柳葉式長頸鏃と圭頭式鏃が基本組成。片刃箭式長頸鏃は激減。

④古墳時代後期後半（6 世紀後半～7 世紀前半）

柳葉式長頸鏃を主軸とし、鑿箭式・三角形式・片刃箭式が少量加わる。

平根系鉄鏃は圭頭式に加えて、方頭式が主要組成に加わる。

九州北部を中心に柳葉式短頸鏃が再流通。

⑤飛鳥時代（7 世紀後半）

主要鉄鏃形式が柳葉式長頸鏃から鑿箭式長頸鏃に移行。

点的に片刃箭式長頸鏃の数量増加。（←西日本地域では片刃箭式は客体的存在）

在地形式の圭頭式・飛燕式・雁又式の存続。

棘篦被の主体化。

⑥奈良時代以降

8 世紀まで圭頭式鏃が存続。

棘篦被から関篦被に移行。

7 世紀後半：鞠智城Ⅰ期（≒鞠智城築造前後）において、
工房では・・・
大宰府を核に「律令的複合冶金工房」が導入され、古墳時代以来の在来の冶金工房と二極化。
製品では・・・
官衙を核に中央様式の鉄鏃群が備蓄され、集落では在地様式の鉄鏃群が存在。

3．鞠智城築造前後の防衛

古代山城：大規模な恒常的防御施設の存在は、古墳時代の戦略と**断絶**する。

備蓄兵器：新式兵器の導入は限定的で、古墳時代の武装と**連続**する。

⇒防御施設としての古代山城の運用は、断絶面と連続面を等しく評価しなければならない。

（1）鞠智城築造前後の戦略・戦術

古代山城と同時代史料となる『日本書紀』記載の集団戦闘を集成し、分類。

①防御施設の包囲（焼き討ち）：古墳時代から飛鳥時代は、血縁集団・部民集団が部隊の核。

②交通路の封鎖：『日本書紀』編纂時の戦略において、最も重視される。

③会戦・陣地戦：渡河地点における迎撃が基本。高所からの狙撃。

④突撃・追撃

⑤奇襲（夜襲）・伏兵

（2）鞠智城跡の遺跡形成過程

古墳時代後期（6世紀後半）には、台地・迫地・低地に即した土地利用（生活圏の形成）。

（3）鞠智城の施設

南側・西側に土塁がめぐり、積極的に「迫地」を城郭構造に取り込んでいる。

現状の４つの城門は城外から視認が難しい位置に存在。

（4）鞠智城の防衛

古代山城は開戦当初から「戦場」としての利用を想定してない。

①兵士の集結場所（派兵）。※鞠智城周辺では、菊池評衙が主要な兵士の集結地点。

②兵糧・兵器の守衛（供給）。

③高所からの敵軍把握。※鞠智城の戦術的運用範囲は、視認領域となる菊鹿盆地が中心。

↓

主戦場は、軍勢の進軍速度が速く、大量動員が可能な「官道」。

とくに、**渡河地点となる菊池川・迫間川・木野川が主要な迎撃地点**となる。

⇒「置盾」を基点とした陣地戦が、古墳時代以来の基本戦術。

天平12年（740年）「藤原広嗣の乱」における板櫃川の戦い。

↓

迎撃に失敗した時点で、古代山城の防御施設としての運用が本格化する。

官道と接続する南方と西方が重要となるが、南方はうてな台地裾と「迫地」が完全な死角。

①古墳時代以来の地勢的理解と②谷部を積極的に組み込んだ城郭構造の存在をふまえると、鞠智城の防衛設計に「迫地」は組み込まれていたと判断できる。

おわりに

阿蘇４火砕流により生み出された段丘崖と浸食谷は、肥後国を特色づける景観である。その「迫地」を取り込む鞠智城では、急峻な崖を利用した陣地戦に展開する可能性がたかく、高所からの弓（弩）矢や投石を想定していたと考えられる。つまり、運用面からも鞠智城の備蓄兵器の主体が弓矢であったと考えられる。

○大野城は標高が高く、比高差も大きいが、全周囲で物理的に城壁にとりつくことができる。
しかも、山裾四方に官道が走り、山裾まで短時間で兵士を大量動員できる。
⇒比高差≒距離と傾斜を利用した高所からの全周囲での対処的迎撃（※兵士の大量動員が必須）
○鞠智城は標高が低く、比高差も小さいが、物理的に城壁にとりつける場所が限定される。
⇒崖面と官道の接続から進軍路が限定されるため、半周囲（局所的）での対処的迎撃。

表『日本書紀』記載の集団戦闘（壬申の乱）

年	月	日	戦場	勝者	敗者	動員人数	兵器	戦術（勝者側）	山城（防御施設）	備考
天武元年	6月	22日	美濃国安八磨郡	天武天皇		—	—	兵（部曲の招集）	—	東宮の食封
天武元年	6月	22～26日	不破道	天武天皇・村国連男依	近江軍	美濃軍勢 3,000人	—	交通路の封鎖	—	
天武元年	6月	24日	飛鳥	天武天皇		—	—	駅鈴の確保→失敗	—	
天武元年	6月	24日	隠郡	天武天皇	近江軍	—	—	焼き討ち	—	
天武元年	6月	24日	伊賀郡	天武天皇	近江軍	—	—	焼き討ち	—	
天武元年	6月	25日	鈴鹿郡の山道	天武天皇	近江軍	500	—	交通路の封鎖	—	
天武元年	6月	—	—	近江朝		—	—	騎馬隊による追撃（構想のみ）	—	
天武元年	6月	27日以前	不破の山中	天武天皇	韋那公磐鍬・書直薬・忍坂直大麻侶	—	—	伏兵	—	書直薬・忍坂直大麻侶を捕縛
天武元年	6月	27日	方々の道	天武天皇		20,000	—	交通路の封鎖	—	
天武元年	6月	29日	飛鳥	大伴連吹負・坂上直熊毛・桑造熊	高坂王・穂積臣百足	数十騎	騎兵・弓・刀	奇襲	—	小墾田の武器庫→近江輸送
天武元年	7月	1日	竜田	坂本臣財ら		300	—	交通路の封鎖	—	河内からの軍勢対策
天武元年	7月	1日	大坂	佐味君少麻呂		数百人	—	交通路の封鎖	—	河内からの軍勢対策
天武元年	7月	1日	石手道	鴨君蝦夷		数百人	—	交通路の封鎖	—	河内からの軍勢対策
天武元年	7月	1日	高安城	坂本臣財	近江軍	—	—	交戦なし	高安城	税倉を焼いて、逃亡。
天武元年	7月	2日	高安城・衛我河	壱伎史韓国	坂本臣財	—	旗	会戦	高安城	明け方西の方を望見。高安城から下って、衛我河を渡り、韓国と河の西で戦った。
天武元年	7月	2日以前	櫂坂道	紀臣大音		—	—	交通路の封鎖	—	
天武元年	7月	2日	伊勢→大和	紀臣阿閉麻呂ら		数万	—	増援	—	
天武元年	7月	2日	不破→近江	村国連男依ら		数万	—	進軍	—	
天武元年	7月	2日	莉萩野	多臣品治		3,000	—	駐屯	—	
天武元年	7月	2日	倉歴道	田中臣足麻呂		—	—	交通路の封鎖	—	
天武元年	7月	2日以前	犬上川のほとり	山部王ら		数万	—	集結→内紛	—	
天武元年	7月	2日以前	玉倉部村	出雲臣狛	近江軍	精兵	—	迎撃	—	
天武元年	7月	3日	奈良山	大伴連吹負		—	—	高所に駐屯	—	奈良山の上に駐屯
天武元年	7月	3日	古京	荒田尾直赤麻呂・忌部首子人		—	置盾	置盾による守衛	—	橋の板をはいで楯につくり、京のまちのあちこちに立てて守り
天武元年	7月	4日	当麻・葦池のほとり	大伴連吹負・来目	壱伎史韓国	—	刀・馬	会戦	—	騎兵による突入
天武元年	7月	4日	飛鳥上道・中道・下道	大伴連吹負		—	—	交通路の封鎖	—	
天武元年	7月	4日	中道・村屋	犬養連五十君・廬井造鯨	大伴連吹負	200の精兵	—	本陣の奇襲	—	
天武元年	7月	4日	上道・箸墓	三輪君高市麻呂・置始連菟	廬井造鯨	—	—	後続の分断	—	
天武元年	7月	4日	奈良山	近江側（大野君果安）	大伴連吹負	—	—	駐屯地の襲撃→追撃→撤退	—	高所から京をうかがう→伏兵の想定
天武元年	7月	5日	倉歴	近江軍（田辺小隅）	田中臣足麻呂	—	旗・鼓・枚	夜襲	城柵	城柵を崩す
天武元年	7月	6日	莉萩野	多臣品治	田辺小隅	—	—	防衛→追撃	—	
天武元年	7月	7日	息長の横河	村国連男依	境部連統薬	—	—	—	—	
天武元年	7月	9日	鳥籠山	村国連男依	秦友足	—	—	—	—	
天武元年	7月	9日	大和京	紀臣阿閉麻呂ら・置始連菟		千余騎	—	援軍	—	軍勢を分ける
天武元年	7月	13日	安河のほとり	村国連男依	社戸臣大口・土師連千島	—	—	—	—	大勝
天武元年	7月	17日	近江国？	村国連男依	栗太の軍	—	—	追撃	—	
天武元年	7月	22日	瀬田	村国連男依・大分君稚臣	大友皇子・智尊ら	—	旗幡・鉦鼓・弓・矛・鎧・刀	渡河地点の掌握	—	弓の列
天武元年	7月	22日	三尾城	羽田公矢国・出雲臣狛	近江軍	—	—	攻城戦	三尾城	城が主戦場
天武元年	7月	22日	山崎・河の南	別将		—	—	—	—	三道から進んで、河の南に集結
天武元年	7月	23日	粟津市	村国連男依	犬養連五十君・谷直塩手	—	—	—	—	

【論文要旨】

鞠智城築造前後の軍備

小嶋　篤

本研究では、鞠智城と大宰府の対比を軸に、「軍備」という視点から鞠智城の実像を追究した。具体的には軍備の要となる「兵器の確保」、「備蓄兵器の実態」、「兵器の運用」を検討した。

「兵器の確保」では、生産場所となる冶金工房を検討した。大宰府の冶金工房のうち、条坊外で操業された製鉄工房では、①始発原料（鉄鉱石・砂鉄）の違いや②製炭遺構の違い、③併設工房の違いが工房ごとに見られ、多系統の技術保有集団が確認できる。また、条坊内では、大宰府直営の大規模な「律令的複合冶金工房」が認められ、筑紫大宰下の兵器生産の存在を裏付ける。なお、鞠智城内の冶金工房は小規模なものであり、城内施設の築造・整備に伴う工具・建築具の生産を担ったと見られ、城内の兵庫に納められた兵器は、城外から「製品」の状態で搬入されたと判断できた。

「備蓄兵器の実態」を探る上で、膨大な資料数を誇る大宰府政庁周辺官衙跡出土鉄製品は極めて重要である。鉄製品の数量と組成からは、長距離戦闘用兵器である「弓矢」の備蓄が実証できる。しかも、備蓄された弓矢には鞠智城Ⅰ期（7世紀後半）以前に生産された兵器も多量に含まれており、長期間にわたる兵器の備蓄が認められた。また、大宰府出土鉄鏃群は東大寺正倉院に保管されている鉄鏃群の型式・組成とも類似しており、大宰府保有兵器が中央様式に準じていたことが分かる。これに対し、肥後国兵士が自備した兵器には、圭頭式鉄鏃をはじめとした在地様式の兵器の存在が認められた。

「兵器の運用」では、防衛施設としての鞠智城を対象に検討した。具体的には、『日本書紀』の記述や鞠智城の施設・土地利用・自然環境・可視領域を個別に分析することで、鞠智城の防衛設計を探った。戦時下における鞠智城の防衛設計では、城内南方の官道を主戦場とし、菊池川・迫間川・木野川の渡河地点を迎撃地点としたと見られる。そして、公的に備蓄されていた弓矢による陣地戦を基本戦術とした。『日本書紀』記載の戦術と備蓄兵器の実態に照らし合わせれば、鞠智城の防衛設計では、鞠智城南方の「迫地」が重要な役割を果たしたと考えられる。

新羅との外交・交流史からみた肥後鞠智城―Ⅰ期後半～Ⅱ期に対する再検討―

京都産業大学・近畿大学 非常勤講師 近藤浩一

はじめに　鞠智城はⅠ～Ⅴ期に区分。昨年度はⅠ期（築城期）とⅣ期に対し、磐井・日羅など６・７世紀以来の肥後地域と朝鮮半島西南地域の交流・外交史を踏まえた視点から検討した。⇒本報告ではⅠ期後半（685 年頃・木﨑 2014）～Ⅱ期を対象とする。既存の研究では、698 年の繕治記録と発掘成果（「L」字形配置建物群など）をもとに城の役割・性格の変化（唐・新羅に対する軍事防御から肥後地域の行政・隼人支配へと）が強調＝鞠智城のもつ多様性とも理解。／鞠智城の八角形建物と二聖山城のそれとの類似点は指摘されるも対外的な側面には触れられていない。７世紀後半～８世紀前半の日本は新羅と国家・王権レベルで緊密な外交を展開－有明海を介した対外交通も継続？→羅唐戦争から統一（676）期の新羅の動向は日本古代山城にも影響を及ぼしたのでは？＋近年の新羅山城の研究成果にも注目。

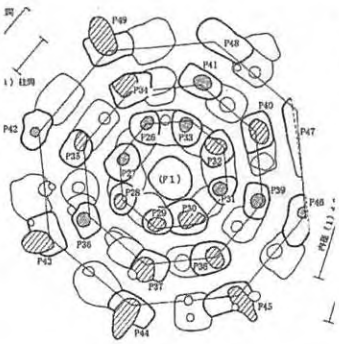
１．Ⅰ期後半～Ⅱ期の鞠智城と増改築された建物群

（１）文献からみたⅡ期前後の鞠智城と大宰府　→初見記事は 698 年に大宰府に対して大野・基肄・鞠智の三城の繕治を命じたもの。→繕治期（Ⅱ期前後）鞠智城の運営主体は大宰府。＋699 年山城修繕記事・基肄城稲穀を記す大宰府跡出土木簡→それらの山城は大宰府を中心に連絡網を持ちながら管轄？※大宰府・筑紫大宰の職掌：天武朝以降（680 年頃）外交と軍事以外に行政的役割が付与されたという指摘。→698 年頃の山城修繕も大宰府の新たな職掌と関連した可能性。

（２）Ⅰ期後半～Ⅱ期に増改築された建物群とその性格⇒Ⅱ期建物配置図（黒い部分）：豊富な建物群

Ⅱ期概要：西住 2015 東京シンポ『Ⅱ期は鞠智城の隆盛期である。「L」字形に掘立柱建物を配置した管理棟的建物群とそれらを取り囲む区画溝（４号溝）が出現する。建物群を取り込んだ区画溝はこの箇所だけのものである。この遺構群の南側に八角形建物や総柱建物を配置するなど、城内施設の充実が図られる。土器の出土量はこの時期が最も多く、城の管理・運営に多くの人員が配置されたものと考えられる。』

◎Ⅱ期＝隆盛期・土器の出土量最多。



L字形建物（62 号・63 号）：19 号を含めてコ字形とも。律令期の官衙的建物群・政庁的役割を想起。→行政施設（官衙的役割）を備える古代山城。八角形建物（31 号・32 号。**左の図は 32・33 号**）：南北の八角形建物跡ともども中央に柱穴（心柱）。内部が密集→建物の役割・性格とも関連。前期難波宮や興福寺などの建物とは根本的に異なる（例外は京都秦氏関連の樫原廃寺八角塔跡）。なぜⅡ期の肥後鞠智城のみに？

○Ⅰ期後半（天武 10〈681〉年・14〈685〉年頃）：18 号（一棟）から 16 号・17 号（二棟）へ改築・増築＝機能強化（20 年前後の伊勢神宮の建て替えを念頭）。＝天武・持統朝の山城建設？→『日本書紀』持統３年(689) ９月条「遣直広参石上朝臣麻呂・直広肆石川朝臣蟲名等於筑紫、給送位記。且監新城」―新城との関係が注目。新城＝リニューアルの山

城も含む？⇒大宰府のもつ行政支配を浸透？硯など官衙的遺物の豊富な鬼ノ城なども７世紀末築城。
●鞠智城などこの時期の山城に行政施設が造られた理由を国内外の視点から検討。

二．新羅における山城（拠点城）の築城と役割―二聖山城を例に―

◎鞠智城の立地（標高の低さ）は日本古代山城のなかでは特異だが新羅（古代朝鮮）山城からみれば一般的。論文集第１表（漢州郡県城）：鞠智城の中心標高は145m前後・二聖山城の生活地も130～180m）。

（１）新羅の拠点城・二聖山城と地方行政　⇒二聖山城など新羅山城の近年の研究成果を紹介。

新羅山城の役割論→既存の説を含めて「逃げ城」ではなく新たに獲得した地域への統治拠点と認識。

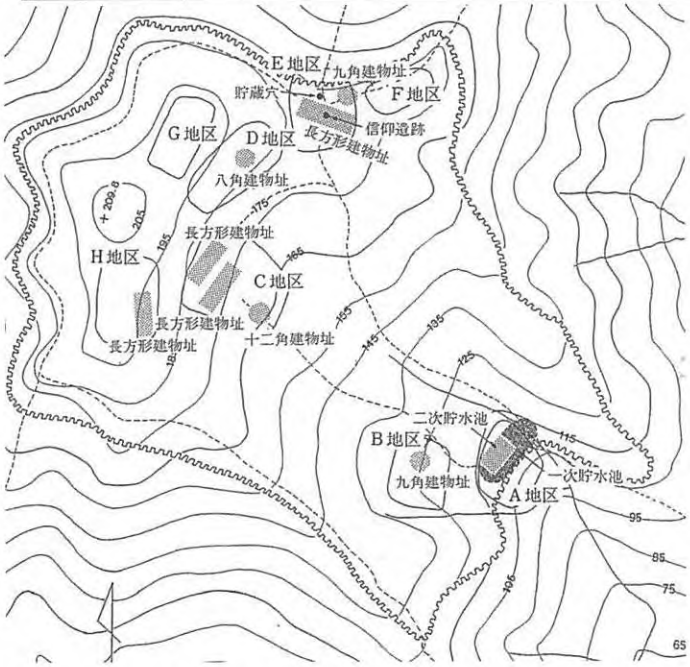
○近年韓国では文献の研究者からも注目（朴省炫氏など）⇒平地との関係を重視した丘陵に位置、当初から軍事面より地方支配を重視した行政施設として築造＝地域社会の中心に拠点城（地方山城）が存在。

※新羅の地方支配制度＝687年頃確立の州郡県制とそれ以前の州―郡―城村制。その実体・変遷は不明な点が多いが、二聖山城出土の戊辰年木簡から知られる通り、王京から派遣された地方官（軍主・幢主・道使）が常駐し在地の村主と協議のもと地方支配を遂行。

□京畿道河南市春宮洞（ソウル市東方・漢江流域を一望）に位置する二聖山城（漢州〈漢山州〉・新州）→初築（６世紀中葉真興王の領土拡張）と改築（676年統一期、郡県城）に区分。

◎二聖山城はその地域の拠点として長期間利用＝鞠智城との最大の共通点。

	前期（６世紀中葉）	後期（７世紀後半・８世紀初～９世紀末期）
城壁	１次城壁	２・３次城壁
貯水池	１次貯水池（戊辰年(608？)木簡出土）	２次貯水池
建物など	Ｅ地区建物、Ｃ地区１・２号長方形建物単弁瓦、貯蔵穴	八角・九角・十二角建物が増築、長弁瓦、貯蔵穴埋め立て



二聖山城城内図・建物配置図（李成市 1997）

戊辰年木簡（608年説→有力・668年説）

Ⅰ　戊辰年正月十二日明南漢城道使　×
Ⅱ　須城道使村主前南漢城城火　×
Ⅲ　□□漢黄去□□□□□　×
Ⅳ　×

●解釈：「前」は日本木簡の「某の前に申す」⇒「正月一二日の明け方に南漢城道使（発信者）が須城の道使と村主（受信者）に宛てる」

←前期Ｃ地区貯水池出土環脚硯（墨跡も付着）

写真：漢陽大学校博物館 2006

◎多数の木簡（約38点）・硯（硯片の総数68点以上）などの文書行政に関わる大量の資料群が出土。
⇒二聖山城に中央官人・在地の有力者が常駐し、システマティックな文書行政にもとづいた地方支配を推進。➡城内にも相応の官衙的な建物群が存在？

（２）二聖山城の性格と内部施設－鞠智城との関連性を探る－⇒鞠智城Ⅱ期の官衙的建物群の源流？

◎長方形礎石建物跡が次のように四棟存在（前期のＣ地区１・２号及びＥ地区のものは大型）

Ｃ地区１号　正面一七間×側面四間（３６２０cm×８００cm）→Ｃ地区は城内最良の場所

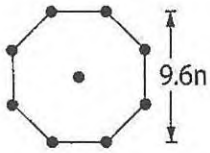
Ｃ地区２号　正面一六間×側面四間（３４００cm×８００cm）→１号・２号は前後規格性をもつ。

Ｅ地区　正面一五間×側面四間（３２０２cm×７８８cm）

Ｈ地区　正面七間×側面三間（１３７０cm×６６０cm）

⇒瓦の出土量の多さから大型で規格性をもった瓦葺礎石建物（Ｅ地区を除き硯も多数出土）。→報告書ではすべて倉庫群と推定されたが、最近の研究により地形上簡略化した政庁のような施設物。→６世紀中葉から行政支配に適した官衙的構造（真興王など国王や上級貴族が度々地方に出向・その際にも利用？）。→改築後（７世紀末）のＤ地区で一層多くの木簡・硯が出土―郡県制の確立に伴い整備強化。

➡Ⅰ期後半～Ⅱ期鞠智城に増改築された官衙的建物群は新羅の拠点城の構造と類似するのでは。新羅の影響が反映されていた？鞠智城にも地方官や大宰府の官人が赴くこともあったのでは？

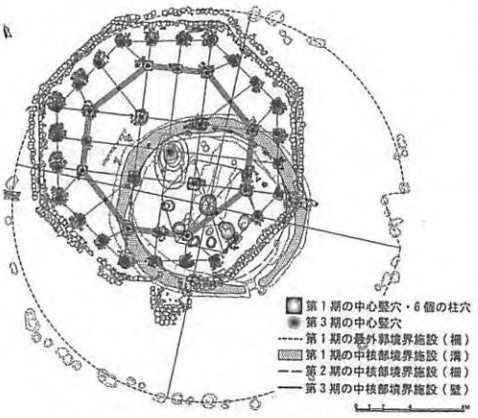


望夷山城
八角形建物

◎鞠智城と**二聖山城（左の図参照）**に共通する八角形建物の関連性に一層注目。内部構造－中心礎石と四個の卵形石の周囲に三重柱穴が巡る。中央の心礎（心柱）が重要。

⇒八角（Ｄ地区）以外にも九角（Ｂ・Ｅ地区）・十二角（Ｃ地区）形建物は統一戦争直後に建設。

※李陽浩 2014 模式図（建築史）：鞠智城に近い時期の古代東アジアの八角形建物遺構の発見例は（古くは５世紀代の高句麗）、679 年頃の王都羅井・京畿道安城市望夷山城など郡県制確立期（七世紀後半～）の統一新羅にほぼ限定（特に山城内に建設）。



羅井１次～３次施設跡・李廷敏 2014

●八角形建物の役割・性格＝慶州王都の国家祭祀・王室祭祀を行う羅井（奈乙、始祖朴赫居世が降誕）は一つの指標→「儀鳳四年皆土」銘文瓦からも統一後の都城改築に合わせて建設。羅井の建造物は視覚的にも新羅王権（統一を達成した武烈王統）を象徴（始祖廟や神宮とも推定）。羅井の建物跡にも中央に明確な竪穴・天柱＝建国以来の祭祀・祭天を継承。

⇒二聖山城などの八角形建物も似たような側面？687 年頃の州郡県制確立にともない王権主導により建設→地域社会における最先端の建造物。※諸説＝鼓楼・祭祀施設・仏教施設・硯倉庫。

➡新羅でも最先端の八角形建物がなぜに肥後鞠智城にも？

３．天武・持統朝の国家建設と古代山城、鞠智城―新羅の影響を中心に―

◎668 年～新羅は熊津都督府と対抗（676 年統一）するため日本（倭国）に使節を派遣。668 年～700 年（25 回以上新羅使来航、10 回ほど遣新羅使）⇒天武・持統朝の新羅との外交・交流が日本の律令国家形成期の諸政策・制度、思想文化に与えた影響は多数（骨品制をモデルにした八色の姓、四等官制、藤原京、新羅村落文書〈695 年〉と類似する美濃型戸籍、仏教祭祀・・）

⇒当代の国家建設に関わる古代山城の再築・運営にも新羅の影響は？

（１）天武・持統朝における新羅の影響と軍事政策　←既存の研究でも山城と言えば軍事防衛

「政の要は軍事なり」：白村江敗戦・壬申の乱を経て権力を掌握した天武朝は軍事面に並々ならぬ関心。

天武４年(675)３月栗隈王を兵政官長に任命（兵政官の創設）→請田 1978 の指摘＝兵政官の別称である大将軍の名称・職掌は新羅の大将軍（兵部令）と同一・同質であり大宝令段階に中国的な兵部省へと変化（新羅使節を通して新羅兵制を受容＋筑紫大宰〈壬申の乱時の対応〉にあった栗隈王任命にも注目）。
○請政・奏請国政（676・685・687・695 年）――統一期新羅の国情・制度を具体的に日本側に伝える。

●直木孝次郎氏の指摘：壬申の乱後の軍備拡充の記録（軍事政策）の大半は天武８年（679）以降（国政が安定する天武朝後期）。国制の要の八色の姓成立、浄御原令制作、戸籍整備とも同一時期。
※直木氏は①～⑪の要因を新羅脅威論から説明するがこの点（坂元説含めて）は同意できない。
①８年２月、辛巳年（天武十年）に親王・諸臣及び百寮人の兵及び馬を検校するを以て、予め貯えしむ。
②　８月、王卿に詔して細馬（良馬）を準備せしめ、群卿の儲くる細馬を迹見駅家の道に検閲す。
③　11 月、初めて関を竜田山・大坂山に置き、難波に羅城を築く。
④９年９月、天皇、大山位以下の官人の馬を長柄杜（大和国葛上郡）に看る。
⑤10 年３月、天皇、新宮の井の上に居て、鼓吹を発せしめ調習せしむ。
⑥　10 月、親王以下群卿、軽市に装束せる鞍馬を検校し、大山位以下馬に乗りて大路を行進す。
⑦11 年 11 月、法を犯す者は直ちに糺弾し、重きを犯す者は逮捕し、対捍する者は当処の兵を起して捕えしむ。
⑧12 年 11 月、諸国に詔して、陣法を習わしむ。
⑨13 年(684)閏４月、詔りして「政の要は軍事なり」といい、文武の官人に兵を用い馬を乗ることを習い、武装を整うる事を命ず。
⑩14 年９月、宮処王以下諸王五人を京及び畿内に遣わし、人夫の兵を校す。
⑪　11 月、鉄一万斤を周芳総令所に送り、筑紫大宰に絁・糸・布・庸布の他、鉄一万斤・箭竹二千連を送る。また諸国に詔して、大角・小角・鼓・吹・幡旗・弩・抛の類を郡家に収めしむ。

◎国内外事情に精通した後期天武朝～持統朝＝新羅との外交関係が成熟したことで強力な国家建設を実行（多くの知識を吸収、実用化へ）？王族・有力貴族のブレーンに新羅人も存在。→諸事項まで新羅は絶好の参考モデル（軍馬に関する記録の多さなども？）。
⇒⑧・⑪などをみても天武後期の軍事政策は早い段階に地方に波及➡⑪山城を有する筑紫・周芳に相当量の軍事用品を供給している。筑紫には新羅使（外交）への給付品の絁や在地首長対策（地域支配）への必需品も送付。→天武朝後期の軍事を含む諸政策（新羅からの最新の知識・情報・文物含む）は地方では山城の地域に最初に伝えられた？その指導的立場を担ったのは大宰・総領（総令）。

（２）大宰・総領制にみる地方支配と新羅型山城の採用

○律令国家形期の広域的な地方支配＝大宰総領制→新羅外交を基盤に推進された天武朝の諸政策の一貫？西日本地域にその任命・活躍がみられるのは、筑紫大宰栗隈王、吉備大宰（679）・⑪周防総領（685）・伊予総領（689）など天武朝から文武朝の比較的短期間。
大宰・総領の性格：天武朝後期の軍政官（坂元 1967）。内政用の行政官（筑紫大宰も天武朝以降外交以外に地方行政に積極関与）⇒本格的展開は天武朝の地方支配と関連。
◎山城の運営とリンク（狩野 2005・仁藤 2014）←鬼ノ城の築城年代が７世紀末と判明。

筑紫―西海道（筑紫国）　水城・大野城・椽（基肆）城・鞠智城・対馬国金田城
周芳―安芸・長門は独立？　長門城・石城山城
伊予―讃岐（土佐・阿波？）　讃岐国山田郡屋嶋城・永納山城・讃岐城山城
吉備―吉備・播磨　鬼ノ城・大廻小廻山城・播磨城山城
畿内―河内・大和（摂津・山背？）　高安城
東国―東国全体（東方八道）　天武の信濃遷都計画

⇒Ⅰ期後半Ⅱ期の鞠智城増改築・同時期の鬼ノ城築造：建物群、木簡・硯や鉄滓・鞴羽口の遺物＝官衙的様相。→国内体制の整備に合わせて筑紫大宰・吉備大宰（総領）などの官人の主導下に実施？持統３

年(689)の石上麻呂らの筑紫派遣・位記給付と新城監察も注目。
※栗隈王に加え、石上麻呂（新羅請政の翌年の 676 年 10 月～翌２月）・伊予総領田中朝臣法麻呂（686 年正月～688 年正月）は遣新羅使として新羅滞在経験をもつ→新羅の諸制度・ノウハウを伝え実行した可能性→日本の山城をとりまく地方支配にも大きな影響（新城監察も彼らの提言？）

●国際感覚に秀でた天武・持統天皇は山城も百済（熊津都督府）型よりは新羅型にシフト。
→持統７年(693)の陣法博士（新羅系統の兵政官の品官。陣立て方法の専門家）の諸国派遣・教習には構造・諸機能の面でも新羅型の山城政策が含まれていた？
○鞠智城の軒丸瓦は丸瓦被せ技法や文様から慶州の雁鴨池や月城で出土する古新羅系統の特徴をもつ（中山 2005・趙源昌 2010、鞠智城と同系統の瓦が同時期の山陽地方にも出土）。＋大宰府跡（軒丸瓦第一段階）でも統一新羅系統の瓦出土。今後は唐山古墳群の新羅人被葬者と大野城の関係にも留意すべき。

➡新羅が機密事項に近い諸制度、山城の内部構造までを日本に伝授した理由は？⇒羅唐戦争の緊迫した状況下が関係？？⇔唐との関係が落ち着く戦後（678 年～）にも請政使派遣、豪華な献物持参。

４．６８０年頃の新羅の西南地域情勢と肥後地域、日本政府―小高句麗国をめぐって―

（１）新羅の西南地域（小高句麗）領域化と小高句麗の日本外交

◎天武朝期の半島西南地域（旧百済地域）情勢に注目→年表①：統一後も 687 年まで完全に新羅の地方制度（州郡県制）に編入されておらず。西南地域の歴史的環境は中国より日本列島と親密。
＝新羅は 670 年８月金馬渚（熊津都督府本拠現扶余から程近い益山）に旧敵国の小高句麗を傀儡政権として復興（674 年安勝を報徳王に）。➡小高句麗 683 年滅亡・684 年反乱制圧まで影響力大。

●680 年前後の新羅の最重要課題：小高句麗を中心に歴史的に肥後地域と深いつながりをもつ西南地域の統治。⇒年表②：小高句麗は新羅送使・新羅使節を伴いながらも日本に頻繁に使節を派遣。

年表①：新羅の西南地域（唐の熊津都督府が統治した旧百済地域）への進出・統治過程

六六九（文武九）欽純角干らを唐に遣わし謝罪
六七〇　唐高宗、新羅が百済の地に侵入するのに怒り使者を留める
　　熊津郡督府と和せんとするも許されず挙兵して討つ
　八月、高句麗王族の安勝を旧百済の金馬渚（全羅北道益山）に封じて高句麗王となす。高句麗遺民集団もそこに安置する
六七一　百済に兵を発する。泗沘（扶余）を占領し所夫里州を設置
六七二　百済古省城攻略。所夫里州総管設置。百済民を以て白衿誓幢をつくる
六七三　外司正を置き、州二人・郡一人
六七四　安勝を改めて報徳王に封ず。国名も報徳国に改名か？
六七八　阿飡天訓を武珍州都督とする
六七九　使を発して耽羅国を略す
六八〇　報徳王安勝に新羅王妹を嫁がせる
六八三（神文王三）安勝を召して蘇判・姓金氏を授け、王都に留める。小高句麗滅亡。高句麗民を以て黄衿誓幢をつくる
六八四　高句麗遺民が金馬渚にて反乱を起こす。平定され、其民を国南州郡に移住させ、其地を金馬郡とする
六八五　完山州とし竜元を総管とする。西原小京・南原小京を置く。下州停を廃し完山停を置く。
六八六　石山・馬山・孤山・沙平四県を置く。泗沘州を郡とし、熊川郡を州とし、発羅州を郡とし、武珍郡を州とする。報徳城の民を以て碧衿誓幢・赤衿誓幢をつくる
六八七　百済残民を以て青衿誓幢をつくる
六八九　西原京城築城　　六九一　南原城築城

年表②：小高句麗と日本の外交・交流史（点線は随行の新羅送使・使節。下線は日本からの遣使。）

六七一（天智十）正月小高句麗（高麗）、上部大相可婁を遣わして進調。八月、小高句麗使可婁ら帰国
六七二（天武元）五月小高句麗、前部富加抃を遣わして進調
六七三　八月小高句麗の上部位頭大兄邯子ら、新羅使節の韓奈末金利益に送られて筑紫に至り、朝貢。
　　一一月、小高句麗使邯子・新羅使薩儒らを筑紫大郡で饗し禄物を賜う
六七五　三月小高句麗使大兄富干ら来朝し朝貢。また新羅使節の級飡朴勤修らも来朝し進調。八月、新羅・小高句麗二国の調使を筑紫において饗し禄物を賜う
六七六　一一月小高句麗大使後部主簿阿于ら、新羅使大奈末金楊原に送られて筑紫に到り朝貢
六七九　二月小高句麗使上部大相桓父ら、新羅送使奈末甘勿那に送られて筑紫に到り、朝貢
　　九月遣新羅使、遣小高句麗使・遣耽羅使、帰国して拝朝
六八〇　五月小高句麗使南部大使卯問ら、新羅使大奈末考那に送られて筑紫に到り、朝貢
六八一　四月小高句麗使卯問らを筑紫で饗し禄物を賜う。五月帰国
　　七月小錦下采女竹羅を大使として新羅に遣わす。また同日、小錦下佐伯連広足を大使に小高句麗に遣わす。九月、遣新羅使・遣小高句麗使が共に帰国して拝朝
六八二　五月遣小高句麗大使佐伯連広足らが帰国し、使旨を御所に報告
　　六月小高句麗王が遣わした下部助有卦婁毛切らが、新羅送使大那末金釈起に送られて筑紫に到り方物を貢す
六八四　五月大使三輪引田難波麻呂らを小高句麗に遣わす。
　　なお、前月の四月には大使高向麻呂らを新羅に遣わす
六八五　九月遣小高句麗使、帰国。帰化高句麗人に禄物を賜う

●新羅の西南地域領土化のなかで小高句麗の日本朝貢はプラスに働かない。白村江の戦を経験した新羅は両者の関係を旧百済と倭国の結びつきのように認識した？（特に 684 年反乱時）⇔日本側も小高句麗事情は関心事（年表②下線の遣使）。新羅人の渡日も増加。→歴史的交流の深かった肥後地域は、地方体制確立期の新羅・律令国家形成期の日本双方に国家支配を揺るがす可能性のある対象と認識。

（２）新羅の対日政策と肥後地域、鞠智城

◎新羅側の日本政府への要請と日本側の対応が鞠智城に反映。

新羅側のアプローチ：小高句麗反乱直後 684 年 12 月（遣新羅使・遣小高句麗使が新羅滞在中）～685 年５月遣新羅使・９月遣小高句麗使の帰国直後→11 月 27 日新羅請政使が来日し６か月間筑紫滞在。

⇒11 月２日に⑪の内容が実施＝大宰総領を中心に鞠智城などが再築？

○689 年石上麻呂の新城監察、693 年諸国への陣法博士派遣にいたるまで、新羅からの要請並びに知識・技術提供を想定できるのでは？

➡天武・持統朝期に鞠智城や鬼ノ城などで官衙的役割が伴うのは新羅の拠点城の山城体系を取り入れたため。→小高句麗など西南地域問題を基軸とした新羅側の対日外交と連動し、有明海沿岸の肥後鞠智城は極めて大きな役割を担う＝統一期の新羅国内でも最先端であった八角形建物が建てられたのも、最新の諸技術・文化的要素を取り入れてリニューアル⇒肥後地域の特性・国際性とも関連。

おわりに―南九州隼人とも関連して―

○天武朝後期～698 年頃の鞠智城＝大宰府管下の広域地方行政に適した施設にリニューアル。

○Ⅰ期（築造）からⅡ期（繕治）への評価＝軍事防衛から地方行政へと変化を遂げたのではない。対外的に新羅との関係を強めることで、山城内に官衙施設を設ける新羅型山城の構造を取り入れて地方行政の面を強化⇒新羅西南地域情勢が安定に向かうと対外的役割は少しずつ軽減（余力が生まれる）。

○南九州隼人との関係有無は？⇒100 ㎞以上離れている南九州の隼人支配政策に関与したとは考えられない。⇔新羅の拠点城（山城）の運営を参照すれば、「不測の事態に備える」役割は有していたのでは。不測の事態とは隼人・渡来新羅人などを含めた肥後地域をとりまくあらゆる出来事。

【論文要旨】

新羅との外交・交流史からみた肥後鞠智城

—Ⅰ期後半～Ⅱ期に対する再検討—

近藤浩一

本稿は、Ⅰ期後半からⅡ期（隆盛期）の肥後鞠智城に増築された「L」字形配置建物群や八角形建物の構造・機能を概観し、それらは近年の研究により鮮明となった二聖山城（韓国河南市）に代表される新羅の山城（拠点城）の形態に類似することを指摘した。さらに鞠智城が新羅拠点城に近づく背景・要因について検討し、統一期前後に半島西南地域の領有化をめざした新羅の日本外交と天武朝後期から持統朝の律令国家建設、特に大宰・総領を中心とする地方支配が密に絡み合っていたことを明らかにした。

まず新羅王権は、その地域と歴史的に深い関係をもつ肥後地域など日本列島との交流を十分に掌握する必要があり、その頃実行していた日本政府への請政に際し、外交政策と合わせて山城（鞠智城）の活用を提言したと推察した。これに対し軍事と地方支配の強化をめざす天武・持統朝は、こうした新羅側の外交姿勢をむしろ好機ととらえ、新羅から最新の知識・情報、文物の収集に努めた。そこには、鞠智城と二聖山城にみられる類似性から知りえたような、山城に関するノウハウ、技術提供も含まれていたのであった。鞠智城において、日本国内のどの山城よりも積極的に増改築がなされたのは、小高句麗など半島西南地域の情勢と連動した、実際の渡来新羅人の増加や肥後地域の旧豪族勢力などの特性と直接関わっていたとみられる。

したがってⅠ期（築造）からⅡ期（繕治）までの鞠智城の役割を総論すれば、既存の研究のように軍事防衛から地方行政へと変化を遂げたのではなく、対外的に新羅との関係を強めることで、山城内に官衙施設を設ける新羅型山城の構造を取り入れて地方行政の面を強化させたと考えられるのである。以後の鞠智城では、天武朝以降行政面の職掌を強化させた筑紫大宰（大宰府）のもとで、より広域的な地方支配にも積極的に関与していったものと思われる。698年の繕治記録は、鞠智城を含む大宰府管轄の山城が互いにネットワークをもち広域的な行政支配を展開したことを物語っている。

そのため、新羅の地方制度が確立し半島西南地域情勢が安定に向かうと、懸案であった有明海をとりまく鞠智城の対外的な役割は少しずつ軽減されていったのである。鞠智城においてそうした余力は、不測の事態に備えた南九州の隼人にまで対処できるネットワークを拡充する契機になったと推察される。ただし、鞠智城が隼人支配に関与することはなかったようである。

この電子書籍は、第 4 回鞠智城跡「特別研究」成果報告会 発表レジュメ集 4 を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、古代山城がある市町村教育委員会、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：第 4 回鞠智城跡「特別研究」成果報告会 発表レジュメ集 4
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話： 096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：西暦 2022 年 7 月 1 日